

APTA では NUSTEP, II STEP, そして III STEP Conference を通して中枢神経障害に対する運動療法のあり方を検討してきた。それは神経生理学のアプローチと呼ばれる狭い体系の乱立から、近年では脳科学の発展や ICF を受けた幅広い概念をもった内容への変遷であった。一方、NUSTEP Conference と理学療法士の誕生とがほぼ同時期であったわが国の理学療法はどのような変遷を辿って今に至っているのだろうか。これまでの経緯を明らかにしながら、未来に向けた中枢神経障害に対するリハビリテーションの姿を探ってみた。

■中枢神経障害に対する運動療法の変遷と動向（星 文彦論文）

中枢神経障害に対する運動療法の変遷を STEP 会議の開催過程とともに振り返った。その過程は、反射階層理論からシステム理論と学習理論へ、障害から可能性へ、構造と機能から機能と適応へ、病態中心主義から患者中心主義へのパラダイムシフトであったと同時に、理学療法士に対してエビデンス指向性を与えてくれた。エビデンスの構築には基礎と臨床研究および臨床実践の各分野の相互依存と情報交換が必要である。また臨床実践の場では、統一評価ツールによる機能障害、機能的制限、活動制限・参加制約の各階層におけるエビデンスの構築が必要である。

■ボバースコンセプトの変遷と今後—成人分野を中心に（大槻利夫論文）

ボバース概念（アプローチ）は、理学療法士による治療介入をその時代の神経学をベースに説明していく、というスタイルで 70 年以上も発展し続けている。この間の経緯を述べるとともに、神経科学を基盤にした現在の治療アプローチについて解説を加えた。

■PNF の変遷と今後（富田 浩論文）

固有受容性神経筋促通法（PNF）は、1950 年頃、当時の神経生理学を根拠として開発された。開発の地であるアメリカ、カイザーリハビリテーションセンターはもとより、日本国内では、日本理学療法士協会主催の学術大会や全国研修会を始め、各種講習会において、現在も PNF は盛んに扱われ、伝えられている。本稿では、今日、中枢神経障害に対する理学療法の方向性の転換が叫ばれているなか、なぜ長く広く PNF が用いられているのか、今後、どのような課題があるのかについて私見を述べる。

■脳卒中に対する理学療法の現状と今後の取り組み（渡邊要一論文）

脳卒中のリハビリテーションにおいては治療時期による機能の分化が進み、疾患の特性上、1 医療機関のみで完結することは非常に少なく、医療・介護の連携が必要不可欠となっている。急性期、回復期では密度の高い集中的な理学療法が望まれ、維持期では生活を主とした理学療法が必要となる。そのような現状の中で理学療法は患者・利用者の生活全体を見据え、その立ち位置を常に理解した治療時期に応じたアプローチが重要であり、medical science としての理学療法と social science としてのリハの適切な選択が、患者・利用者のニーズに応える鍵となる。

■脳性麻痺の NDT を考える（宮崎 泰論文）

「脳性麻痺リハビリテーションガイドライン」では、脳性麻痺に関して現段階でのエビデンスに基づいた治療がどこまで可能なかを明らかにしている。本稿では、このガイドラインにおける NDT の推奨段階決定の質的評価の最終採用論文となったアメリカ脳性麻痺協会のエビデンスレポート 1 編と系統別レビュー 3 編の概要を紹介し、NDT の現状について解説するとともに、研究方法論的な問題について若干の検討を加えた。

■とびらページ(p537)の作品について：作・解説——牧野文幸氏（口と足で描く芸術家協会）

「水静月無波」 みず しずかにして つきに なみなし

水は静かで、水面に宿る月影はくだけない。

心が落ち着いて乱れていなければ、

物事をきちんと見定めることができる。

■プレゼントのお知らせ 抽選で 1 名の方に、牧野氏の作品を差し上げます。巻末のアンケートはがきに「プレゼント希望」の旨と、希望の作品が掲載された号数をお書き添えの上、編集室までお送り下さい。

■とびら本文の引用について「重力ピエロ（新潮社、2003）」伊坂幸太郎より。